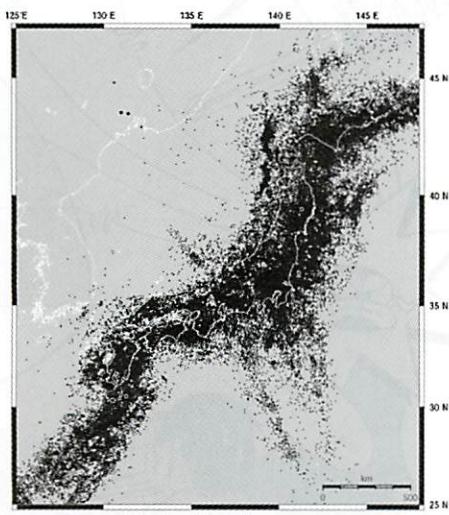


地震国・日本

今年の5月26日に、宮城県沖の地下70kmでマグニチュード7の地震があったことは記憶に新しいと思います。この大地震による大地の揺れは、日本が地震国であることを、あらためて私たちに思い出させてくれました。

小さな地震まで地図上に示すと、下図のように、日本列島は隙間なく埋めつくされているように見えます。「なぜ地震が起こるのか」、「地震を予知することはできるのか」ということに日本人が強い関心を持ってきた理由がうかがえます。



過去5年間(1997.10-2002.12)の地震(気象庁より)*。

日本地震学会：世界で最初の地震学会

1880年(明治13年)4月、横浜地震を契機として、日本地震学会が創設されました。(世界で最初の地震学会の誕生です!)その当時の会員数は120名程度でしたが、戦争による中断などの変遷を経て、現在では会員数2,600名以上の社団法人日本地震学会に発展しています。学会には、固体惑星地球物理学や地震工学をはじめとして、地震に関する様々な分野の研究者・教育者・技術者・行政関係者などが参加しています。

学会の主な目的は、地震及び地球内部に関連する諸現象の研究、地震災害の軽減と防止、ならびに社会に向けての情報の発信です。この目的のために、年2回の定期大会(学会)とシンポジウムの開催、会誌「地震」・情報誌「日本地震学会ニュースレター」・広報紙「なゐふる」(古語で大地の震動のこと)の発行のほか、欧文誌「Earth, Planets and Space」の地球科学

関連の他学会との共同出版などの活動をおこなっています。また、学会関係者と一般の方々との交流の場として、各種のイベントの開催や、「なゐふるメーリングリスト」の運営を行っています。

地震学会メンバーの仕事と研究は?

地震は災害を引き起こす「悪者」として考えられています。1995年1月の兵庫県南部地震では6,000名以上の方が犠牲になりました。このような地震災害を軽減するために、大地震の発生(時間・場所・大きさ)を予測する研究、大地震の揺れの強さを事前に推定する研究など、地震防災に直結した研究が学会員によって活発になされています。

この他にも、地震がどのようなメカニズムで起きるのかを調べたり、地球の内部がどうなっているか、マントル対流はどのように起きているかなど、「生きている地球のダイナミズム」を探求する研究をしている会員もたくさんいます(次ページをご覧ください)。また、中学校や高校の理科の先生など、教育に携わりながら地震に关心を持っている会員もいます。

THE 地震展

日本地震学会は、「THE 地震展」の主催団体として、「地震の怖さ」だけでなく、最先端の地震の研究を通じてわかってきた「地震のメカニズム」や「地球構造の複雑さ」についても紹介できるような展示を考えました。皆さんに「研究の面白さ」や「地震防災の重要性」を感じ取っていただけたら、こんなにうれしいことはありません。

なお、日本地震学会のホームページでは、学会活動についての紹介とともに、地震に関するQ&Aなども掲載しており、地震についての理解を深めることのできる内容となっております。なゐふるメーリングリストの入会もホームページから可能です。皆様のアクセスとご意見、ご質問をお待ちしております。(URLとE-mailアドレスについては最終ページをご覧ください)

*気象庁では、地震防災対策特別措置法の趣旨に沿って、大学等関係機関から地震観測データの提供を受け、文部科学省と協力して、これを整理・分析しています。図版作成には一部でGMTを使用しました。(#) 平成15年1月現在：北海道大学、弘前大学、東北大、東京大学、名古屋大学、京都大学、高知大学、九州大学、鹿児島大学、独立行政法人防災科学技術研究所、独立行政法人産業技術総合研究所、東京都、静岡県、神奈川県温泉地学研究所、横浜市および海洋科学技術センター。



強震動： 大地震の時の強い揺れはどのようにして起きるのか、被害はどのような揺れで発生するのかを研究しています。

地震学会は こんな研究を カバーしています



地球表面の70%は海です。観測船や海底地震計による海域の観測は欠くことができません。

ここに挙げたのはほんの一例にすぎません。それぞれの分野の研究について、『なみふる』でもおいおい紹介していく予定です。

©1997 H.P.KATAO

地震学への扉「なるふる」

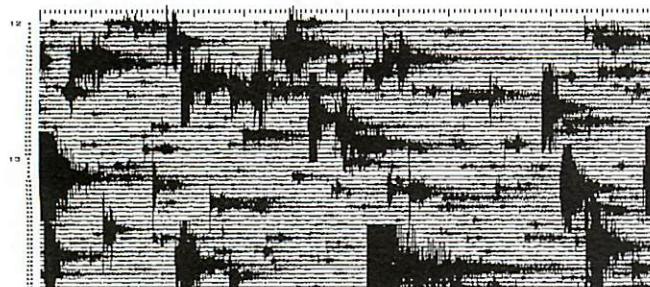
「学問」と名のつくものは、なんだかとても難しそうですが、「地震学」はそうではありません。私たちの日常生活にも、知らず知らずのうちに深く根をおろして関わっているのです。

小紙「なるふる」は、地震学の現状（最先端の研究や地震防災などを含む）を、ひろく皆さんに知るために、地震学会（編集はボランティアが行っています）が隔月で発行している広報紙です。

「なるふる」は、おかげさまで、多くの非会員の方にもご愛読いただき、今春で創刊から7年目を迎えました。この場を借りて、小紙「なるふる」の内容について、簡単にご紹介します。

自然災害の速報と解説

大きな地震が発生すると、地面の強い揺れによる直接的な震災の他にも、津波などによる被害が発生します。地震学では、地震に関係する様々な自然現象を取り扱っており、ひろくは火山活動なども研究の対象としています。これまで、「なるふる」では、2001年芸予地震、2001年インド西部大地震、2000年鳥取県西部地震、2000年三宅島の地震・火山活動、2000年有珠山の地震・火山活動、1999年台湾集集地震などを、地球科学的な解説や防災関連情報を交えて紹介してきました。



1999年台湾集集地震の余震記録。2時間の連続波形。
(第17号より)

広報紙「なるふる」購読申込のご案内

日本地震学会の広報紙「なるふる」は、隔月発行（年間6号）しております。「なるふる」の購読をご希望の方は、氏名、住所、電話番号を明記の上、年間購読料（日本地震学会会員：800円、非会員1200円、いずれも送料込）を郵便振替で振替口座00120-0-11918「日本地震学会」にお振り込みください（通信欄に「広報紙希望」とご記入ください）。なお、「なるふる」は日本地震学会ホームページ (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/ssj/>) でもご覧になれ、pdfファイル版を無料でダウンロードして印刷することもできます。

日本地震学会広報紙「なるふる」 THE地震展号 2003年8月1日発行 定価：無料

発行者 (社)日本地震学会/東京都文京区本郷6-26-12 東京RSビル8F (〒113-0033)

電話 03-5803-9570 FAX 03-5803-9577 (営業日：月～金)

編集者 広報委員会/

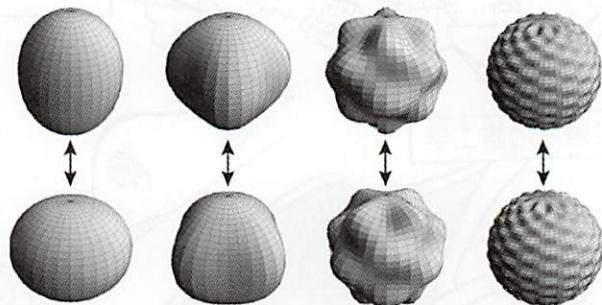
末次大輔（委員長）、吉本和生（編集長）、五十嵐俊博、加藤護、桑原央治、小泉尚嗣、武村雅之、束田進也、中川和之、中村浩二、古村孝志、山田知朗

E-mail zisin-pr@ml.asahi-net.or.jp

印 刷 創文印刷工業(株)

自然科学における研究の最先端

地震学の中には、複雑な数式表現を用いたり、超高速のスーパーコンピュータを駆使して行われているような、最先端の研究も含まれています。日本の地震学会は、常に世界の先導的な役割を果たしています。「なるふる」では、最新のトピックスについても分かり易くお伝えしています。最近では、“地球深部の高温高圧の世界を探る研究”、“地球の伸び縮みやねじれの超精密計測”、“世界最高速のスーパーコンピュータ「地球シミュレータ」”などを、第一線の研究者が詳しく解説しています。



時間とともに、地球はゴムまりのように凸凹に変形しています。(第37号より)

社会生活と地震の関わり

まるで天気予報の「降水確率」ように、「地震の発生確率」という言葉が、最近のニュースなどで使われています。「なるふる」では、このような地震学用語の説明の他に、連載として「活断層お国めぐり」、「揺れのお話」、「絵図から情報を汲む」などの地域に密着した情報を提供しています。また、地震学会が行っている、各種のイベントについても紹介しています。

皆さんも、このTHE地震展を機に、情報盛りだくさんの「なるふる」をご購読してみてはいかがですか？ バックナンバーについては、下記の日本地震学会のホームページからもご覧いただけます。

Check it out!

※本紙に掲載された記事等の著作権は日本地震学会に帰属します。